

## 特集 それは旅から始まった。

旅が持つ不思議な力。癒されたり、既成の価値観を再考したり、この世界の矛盾に目を向けたり、心の中に故郷を持ち続けることができたり、根を張る場所を見つけたり…。今回の特集では、旅がもっている様々な可能性を探りたい。まずは、4名の方々に、旅の写真と旅を巡る記憶を寄せていただいた。



■20歳、インドを歩いていた頃

「おまえ、くよくよしているけどさ、そのままでいいんじゃないの?」

それは、モンスーンの迫るタイ・バンコクのチャイナタウンで、僕に向かって投げられた救いの言葉だった。

日本ではいつもくよくよして、ひねくれていた。自分を襲う劣等感に押しつぶされそうになりながら、精神科医を目指し、医学部に入ったが、なぜこれほどまでの劣等感が生じているのか、学問の途中ではよくわからなかった。自分探しの衝動は突然訪れ、未知なるインドへの無知な旅が始まった。しかしその途中で立ち寄った

バンコクで、初めて仲良くなったタイ人の友だちに、「そのままでいいこと」を指摘されたのだった。いつも人と比べていた日本の日々が嘘のように散っていった。旅で気持ちが高揚していたことも、開放的になっていたこともあるだろう。そして外国人と友だちになれる可能性が自分にもあることを知った瞬間だった。

旅は、自己改革の大きな教科書であった。そしてそれは読み解くために大きな苦労があるがゆえに、得るものも大きい。丸暗記できない魅力にあふれている。(NPO地球のステージ 桑山紀彦)

平坦で緑が多い写真を見て、「北海道?」と言う人もいました。7年前に訪れたバングラデシュのことです。街は活気にあふれ、人びとは自分の仕事に誇りをもっていました。食べる料理は、口がやけどするほど辛いのに、とにかくおいしい。リキシャにのって郊外へ出ると、村の木々に鮮やかなサリが映え、にわとりがダチョウみたいに走り回っていました。とても美しい国。そして人びとのほらかな笑顔と、「50年後私達の国は豊かになります」

という力強い、希望と自信に満ちた若者の言葉に胸を打たれた旅でした。

「日本の未来も、バングラデシュと同じように明るいんだ」と思いたい。そのためにはどうしたらいいのか、そんなことを強く考えました。いま、長野県の山村にある教育系NPOで仕事をしていますが、そのときの思いと私にとってのバングラデシュの旅は今も続いています。(NPOスタッフ 松本恵)



■協会主催バングラデシュスタディーツアーで訪ねた村



■一期一会 in ボカラ(ネパール)

旅に出かけて行くことが「旅行」であるならば、そもそも「旅」とは..?

多忙な毎日を送っている我々にとって、今一番必要なものは束の間の休息であり、心の安らぎでありましょう。

新しい発見を求め、或いは自分を取り戻しに家を出る。それこそが「旅」の出発点です。「旅」は心身とともにリフレッシュさせる最高の特効薬でもあります。日常から非日常の世界へ。繰り返される平凡な日

常の連続を堅持する為にも、時として小休止は必要です。

それほどお金をかけなくても、長い期間でなくても、どこかの場所であろうとも、誰でも「旅」を楽しむことができ、その楽しみ方も人それぞれです。目的地へ到着したら、まずは深呼吸。「旅」を充分楽しむことができたなら再び日常の世界に戻った後も、何だかがんばれそうな、そんな気持ちが湧いて来ます。(旅行会社勤務 堀江俊雄)

戦直前のイラクです。多くの日本人と同じように、私はイラクを怖い国と思って入国しました。しかし、イラクの人々は見知らぬ外国人の私たちを家に招き入れてもてなしてくれたり、街中を歩くと多くの人が「こんにちは」と話しかけてくれたりしました。時間や約束へのルーズさにはびっくりでしたが、お金にこだわり忙しく生きる私たちとどちらが幸せだろうかと考えさせられました。また、絶えない戦争にめげず、強く明るく生きるイ

ラクの人々を見て、イラクを脅威だと言って戦車で侵入していく私たちとは何なのだろうと思いました。

この戦争で約1万人が亡くなったことを思うと、「家族のおかげで幸せです」と話してくれた町の人々が気がかりです。(高校生 石村竜太)



■イラクで出会った人々

# それは旅から始まった。

ムリンディ・ジャパン・ワンラブ・プロジェクト  
ルダシングア 真美さん



最初にアフリカに行った頃の真美さん

神奈川県国際交流協会のスタディツアー（詳細は4頁）で訪問するNGO:ムリンディ・ジャパン・ワンラブ・プロジェクトの代表であるルダシングア 真美さんに、彼女が活動に取り組みきっかけにもなったアフリカへの旅について話を聞いた。

## 「逃げ」から始まった旅の軌跡

私の場合、「逃げ」から始まった。3年間「まじめなOL」をしていたのだけれど、仕事に発展性がある訳でもなく、ある時ふっと、自分はどの位必要なのかと疑問を抱くようになった。

縛られるのが嫌だったのかもしれない。会社を辞めて、それから3年間、海外に出るための資金を貯めることにした。どこでもいいから、日本の外で過ごす時間がたっぷり欲しかった。

そんな時期に、地元の本屋で偶然手に取った『地球の歩き方・東アフリカ編』（ダイヤモンド・ビッグ社）にケニアのスワヒリ語学校のことが書いてあった。その場で住所をメモして、問い合わせの手紙を書いた。それまで特にアフリカに思い入れがあったわけではないのだけれど、試験に合格して、その年の秋には、ケニアに行くことになった。

自分の中で、焦りみたいなものがあったのかもしれない。当時、私は26歳で、若くもない、年もとっていない中途半端な時期。自分を新しく変えるには今だ、と思い切って出発した。

## ケニアへ

スワヒリ語学校での5ヶ月は、アフリカを知るチャンスくれた。卒業してからも、資金がつかまるまではケニアにしよう、ナイロビ在住の日本人宅に居候させてもらい、近隣の国々を旅した。

ケニアでの生活が合っていたのだと思う。日本でかったるいと思っていた部分から解放されて、変なしがらみや、建前だけの付き合いというのがなくて、すごく楽だった。

色々な刺激的な出会いがあって、(現在のパートナーでルワンダ出身の)ガテラと出会ったのもそのころ。でも一年経って、自分でも区切りをつけなければと思い、経験を消化しきれないまま、日本に帰ることになった。

## アフリカに恋してしまった

その時の感情、気持ちというのをどれだけでもうまく表現できるかわからないけれど、少なくとも、1年経ってケニアを出た時点で、アフリカというものに恋してしまっていた。

とにかくあそこに行きたい、という気持ち。四六時中アフリカのことを考え、何をやって

もアフリカにつながってしまう状況だった。「アフリカに帰りたい」。行きたいじゃなくて、帰りたい、という気持ちになっていた。

## ルワンダで義足を作る

ガテラと、祖国ルワンダのために何かをしたいとずっと話していて、足に障害を持つ彼が日本で義肢を作った時に、2人とも直感的に、この技術をルワンダに伝えていこうと感じた。

私自身も会社に戻るのには限界を感じていたし、手に職をつけたいと思っていたので、義肢製作所に弟子入りし、1996年にルワンダのキガリに「ムリンディ・ジャパン・ワンラブ・プロジェクト」を立ち上げた。最初にケニアに行ってから7年経っていた。

## 「アフリカ」という言葉

最初に旅したときは、「アフリカ」というかなり漠然としたものに、夢中だった。今はこだわりを持っているのはルワンダと言える。

ルワンダに恋をしているか、と聞かれるとそう言い切る自信はない。旅していた頃は、楽しい部分だけ見ていればよかった。今は仕事で、かったるいと感じたり、怒っている時も多い。もちろん好きだけれど、「恋焦がれる」という気持ちとは違う気がする。

旅をして、ある場所を通過するだけなら、きれい事を通せる。ある意味、一生旅ができればそれはそれで幸せなのかもしれない。でも自分がそういう状況でいられるかといえ、今はできないし、そうじゃない状況になってよかったな、とも思う。

でも、リゾート行っのんびりしたいな、自由に旅したいな、なんて思うこともある。

## パラリンピック出場

パラリンピックに出場しようというのは、ガテラ アイディア。ルワンダチームを結成して、2000年のシドニー大会に出場した。2004年アテネ大会にも選手を送ろうと現在、練習を重ねている。

シドニー行きは、純粋な旅ではなかったけど、それまでルワンダに6年間いたから、異なる肌の色の人々が住む国に行くってことだけで新鮮だった。

初めて行く国はどんな所だろうと、イメージを膨らませて、飛行機に乗って、知らない国に行くというだけで、ワクワクした。

## 「日本に行く」「ルワンダに帰る」

最近自分でも考えている。自分はルワン

ダと日本、どちらに属しているんだろうと。

飛行機が成田に到着したとき、「ただいま」なのか「こんにちは」なのか。もちろん、勝手がわかっているのは、日本。それにやっぱり餃子や明太子はうまい、と思う。

でも、物理的に多くの時間をすごしているのはルワンダで、キガリの空港に着くと「ただいま」と迷いなく言える。日本は「出張する国」になりつつあるかもしれない。

### でも、私はルワンダ人にはなれない

最初はルワンダの人々と同じになりたい、という気持ちでいたけど、やはりそれは無理。どうあがいても私は先進国から来た人間。彼らとは同等にはなれない。

特に今は人を雇っていて、社長は社員になれない。威張る気はないけれど、なめられないように、いつも気を張っているから、しんどいと感じることもある。

ルワンダに来て、日本人として意識することも多い。海外に行くときも、日本人の私は簡単に済む入国手続きで、ガテラはいつも質問攻めにあう。人間平等ではないとつくづく思う。

### 日本からのお客さんを受け入れて

ゲストハウスを始めるようになって、日本からのお客さんを受け入れる度に複雑な想いになる。

「ルワンダは貧しいから」と、機内食で出た砂糖や塩をくれたり、帰国時に、自分たちが着ていた泥のついたままの服を置いていく人がいる。

一言「汚れているけど」と断ってくれば、私もそれに対して感じたことを相手に言えるけれども、黙って置いていかれるというのは気持ちのいいものではない。従業員の女性に泥付きのズボンを見せた時に、彼女が見せた寂しそうな表情が忘れられない。

### 旅に出るということ

知らない人々が住む所に行くこと。初めての場所であれば、さらに刺激的。飛行機に乗る時は、「ふいふ。私はこれから旅にでるのよ。」と空港に着くだけで気分が高まる。

旅の目的とかも大切かもしれないけど、出た者勝ちというか、とりあえず、旅立って、自

分で見て考えることが大切だと思う。

自分も旅に出ることで人生変わった。私、実はなかなか決断ができないタイプ。今まできっかけは誰かが作ってくれた気がする。後ろからけっ飛ばしてくれたり、もう後戻りできない状態にまできて、やるしかない、ということになったような。勢いなんだよね。

きっかけはいくらあってもいいし、旅は、きっかけをつかむ一番いい手段だと思う。周りの環境を変える。気候、ことば、におい、顔が違うところに行く。

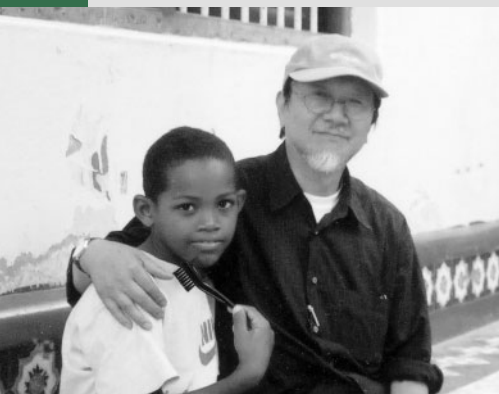
色々なハブニングがあるから、生き生きする。そこで自分が試せる。自分を発見する。旅にはそんなきっかけがたくさんあると思う。(聞き手T)



パラリンピック・ルワンダ代表サッカーチーム (左端がガテラさん)

## スタディツアー POWER OF LIFEを 取り戻すために

20代でアフリカを旅し、そこで学んだことを現在の活動の原点にしている、楠原 彰さん(國學院大學教授)に、スタディツアーについて話を伺った。



■ザンジバル島(タンザニア)で2003年8月撮影

◆1989年から、楠原さんは、スタディツアーに関わっている。行き先はタイやインドだ。

タイツアーは、主に大学の「第三世界の開発と文化」という授業で参加者を募っている。一方のインドツアーは、過去のツアー

一参加者が立ち上げたNGO(MTK“インドの森の民とつながる会”)が企画している。

◆タイツアーでは、市場経済にあまり依存しすぎないように生活している村を訪問する。その村では、教育を受けた若者が、村を去り都市に行ってしまう現実を重く考え「村に残る教育」に取り組み、村人が学校のカリキュラムの作成にも関わる。

山奥の村の、その取り組みの意義の大きさに気づく学生は少ないそうだが、このスタディツアーの長所を「勉強しないこと」と考える楠原さんは、示唆を与えない。

出発前にも会話の練習以外に「勉強」はしない。「専門家を作るのが目的ではない。このツアーを一つの出発点にして、自分で世界に向かい合ってくれればいい。」という想いからだ。

◆楠原さんは、学生とのスタディツアーについて、「教師と学生という(縦の)関係を持ち込んだら駄目。別の意味の学校を作るだけ。参加者を管理してしまう。」と語る。それは、参加者の学ぶ力を尊重し、心を開き、お互いにつながり合う場を創り出すための挑戦だ。

だから、村に滞在する期間は一緒に過ごす、その後の行動は参加者にゆだねる。参加者は、体調管理などの危機管理を自ら行わなければならない。楠原さんは、スタディツアーを、参加者が自分自身の命と

向き合う場としても考えている。

◆「本当にこの村の人たちと出会っていいのか」自問自答する楠原さんは、外部の人間の訪問について、「参加者が多用する文明の利器は、現地の生活に大きな影響を与える。結局スタディツアーは、村から学ぶといいながら、村を壊しにいつているのかと思う。」と語った。

この問題については、頻りに現地NGOとも議論する。NGOは、「壊さなきゃいけないこともある。世界が知っていることを、ここだけが知らないということはある。だが、なるべく物はあげないでくれ。」と言う。二つの考えの狭間で、答えは今も見つからない。

◆2001年のインドツアーには、障害者の参加もあった。「参加者はインドに出会うのと同時に、日本で身近に暮らす障害者と出会い、学び合えたのでは」と楠原さんは振り返る。現地の障害者との交流も実現した。さらに楠原さんは、「タイの村とインドの村の相互訪問を実現したい。」と今後を語る。

そんなツアーの報告書を開くと、参加者の魂の言葉が溢れる。参加者は、私たちの隣人の薄暗闇の中にある命と確かに共鳴し、共に生きるためのPOWER OF LIFE(生命の力)をこの手に取り戻す一つの入口に立っている。(F)

ピース  
メッセンジャー  
かながわ

## 「人間の安全保障」と 「民際協力」を考えるルワンダへの旅

1994年の内戦後、新しい国づくりをすすめているルワンダ。「ムリンディ・ジャパン・ワンラブ・プロジェクト」は、1996年に設立され、内戦や事故で障害を負った人々のための義肢装具製作やルワンダ人義肢装具士の育成等を行っています。また、障害者スポーツや他県での巡回診療など常に新しい事業を立ち上げ、障害者の自立支援を目指した活動を続けています。

神奈川県国際交流協会では、「かながわ民際協力基金」というNGOによる国際協力活動支援のための助成金制度を通じて、ワンラブ・プロジェクトとの関わりが続いています。今年、基金設立10周年という節目の年に、ルワンダでの国際協力活動の現場を訪ねる旅を企画しました。

初めて民主的な選挙で選ばれたカガメ大統領の下で「人間の安全保障」はどう位置づけられるのか。「ムリンディ・ジャパン・ワンラブ・プロジェクト」の活動から、「民際協力」の現状についても考えます。ルワンダの人々と交流し、日本文化を紹介する「ジャパンデー」も滞在期間中に開催予定です。アイデアを出し合い、一緒に作る旅に参加しませんか。

### ■ツアー概要

●実施時期：2004年3月16日(火)～26日(金) 10泊11日(機内泊2回)

●利用予定航空会社：エミレーツ航空(羽田～関西空港～デュバイ～ナイロビ)、ケニア航空(ナイロビ～キガリ)

●主な訪問先：ムリンディ・ジャパン・ワンラブ・プロジェクト ルワンダ事務所(キガリ)

### ●内容

・ジャパンデー企画(日本食の販売や、あなたの特技を披露して、ルワンダの人々に日本の文化・生活を紹介しよう!)

・障害者スポーツ(2004年アテネパラリンピックに出場するルワンダチームを見学・応援しよう!)

・地方巡回診療同行(ワンラブ・プロジェクトの地方での活動を見てみよう!)

### ●宿泊先

ルワンダ…ワンラブ・ゲストハウス

ケニア…ナイロビ市内のホテル等

●定員：15名(最低催行人数8名)

●参加費：約38万円(航空運賃、現地移動費、宿泊代、食費、ビザ取得料を含みます。予防接種代、保険料、土産代、羽田空港までの交通費は含みません。)

●事前研修：2003年12月、2004年1月・2月に事前研修を行います。ルワンダの現在についての話などを予定しています。

●問合せ：国際協力課(担当:富本潤子)  
(月曜休み)

TEL:045-896-2964 FAX:045-896-2945

E-mail:tomimoto@k-i-a.or.jp

※ツアーの詳しい旅程、主催旅行会社については、10月下旬に決定します。関心のある方のお問合せをお待ちしています。



■少年、機関車に乗る(配給:ユーロスペース)

## 神奈川県国際交流協会・会員のつどい 映画『少年、機関車に乗る』上映会

タジキスタンと旧ソ連の合作映画を上映します。ぜひ、おいでください。  
(1991年/タジキスタン・旧ソ連合作/モノクロ/100分)

### ■ストーリー

17才の少年ファルーと7才の弟アザマトは、おばあちゃんと3人暮らし。遠くの町に住む父親に会うため、オンボロ機関車に乗って旅に出た兄弟を、予期せぬ出来事が待ち受けていた。実家の前で機関車を止め、着替えや食料を受け取る運転士、線路沿いに走るトラックとの競走、機関車に向かって石を投げつけてくる子どもたち…。二人を乗せた機関車は、中央アジアの大平原をガタゴトと走っていく。

●日時：11月19日(水) 19:00～(開場:18:30)

●場所：あーだ 353 (地球市民かながわプラザ) 2階 プラザホール

●入場料：1,000円(会員:500円)

●申込み：不要(但し、先着200名様)

●問合せ：国際協力課(月曜休み)

TEL:045-896-2964

地球市民  
フォーラム  
プレセミナー「持続可能な暮らしを考える」  
が開催されます！

危機的な状況にある私たちの地球環境に焦点をあて、私たちの暮らしを根本から見つめ直すために「持続可能な暮らしを考える」をテーマにした連続セミナーを開催します。このセミナーは、2004年2月21日(土)、22日(日)に開催される地球市民フォーラムのプレ企画として開催されるものです。

県内で持続可能なさまざまな活動を実際に展開されているキーパーソンをお招きして、「食」や「農」を通して私たちの生活全般をみつめなおすほか、どのような活動が私たちにできるのか、「ものづくり」のワークショップなどを織り交ぜながら考えていきます。また、2003年11月に策定されるローカル・アジェンダ、「新アジェンダ21かながわ(仮称)」の内容を実際にどのように実現していくのかについても考えます。

## ①「ローカルアジェンダを考える」

●日時：2003年11月16日(日)

●講師：鍋木孝昭さん(かながわ地球環境保全推進会議検討委員会委員)、高橋晃さん(グリーン・マップ横浜代表)

## ②「ピースローソクをつくろう」

●日時：2003年12月7日(日)

●講師：小形恵さん(ナマケモノ倶楽部、ゆっくり堂)

## ③「地元の野菜をエコクッキングしよう」

●日時：2004年1月17日(土)

●講師：西岡政子さん(環境問題研究者)ほか

## ④「持続可能なコミュニティを考える」

●日時：2004年2月8日(日)

●講師：大原一興さん(横浜国立大学助教授)、古橋道代さん(サステナブルコミュニティ研究所員)

## 【共通事項】

●時間：いずれも午後1時30分から

●場所：①のみ「フォーラムよこはま」(ランドマークタワー13F JR桜木町下車徒歩5分) 他は全て **あーさ びさど**。

●参加費：無料

※ただし、2回(1,000円程度)・3回(800円程度)は材料費がかかります。

●申込み：企画情報課(月曜休み)

TEL:045-896-2896 E-mail:kikaku@k-i-a.or.jp

※①、④はNPO法人アリスセンターとの共催事業です。

第6回・地球市民  
学習リーダーセミナー「まなびの工具箱」「違い」を豊かさにつなげる  
学級風土をつくろう

学校の中の学級は、多文化共生社会を実現する最前線の現場。「違い」を持っている一人ひとりがお互いを尊重しあい、さまざまな文化的背景を持つ少数者の子どもが安心して生き生きと過ごせる学級をつくるために、先生とその学級の子どもたちはどんな共同作業ができるでしょうか？ このセミナーでは、「違い」を豊かさにつなげる、お互いに支え合える学級づくりの方法を参加者のみなさんと一緒に考え、今後の活動プランを作成します。

●日時：11月16日(日) 13:30~16:00

●場所：**あーさ びさど** 1階 ワークショップルーム

●講師：木野美穂さん((特活)国際理解教育センター(ERIC)スタッフ)

●定員：30名(申込先着順)

●対象：教育関係者、NGO関係者ほか、「違い」を豊かさにつなげる学級風土づくりに関心がある方

●参加費：無料

●申込方法：①講座名、②氏名(ふりがな)、③所属(学校名や団体名)、④連絡先(電話、FAX、Eメール)をすべて明記し、電話/FAX/Eメールにて下記まで。

※参加いただけない場合のみ、こちらからご連絡します。

●問合せ・申込先 企画情報課(担当:山内)(月曜休み)

TEL:045-896-2896 FAX:045-896-2945

E-mail:kikaku@k-i-a.or.jp

## 2003年度・第4回

## 食と暮らしの体験セミナー

「食」とおとして、世界の様々な土地の暮らしや風土を紹介する、こども向けのワークショップです。



●日時：2003年12月14日(日)10:00~14:00頃

●場所：**あーさ びさど** 1階 料理室他

●内容：家庭料理体験と会食のあと、遊びや工作、踊りなどの体験プログラムや質問コーナーなどがあります。テーマは、「ブラジル」を予定しています。(内容が変わることもありますのでご了承下さい)

●定員：30名(11月中旬より申込受付)

●対象：小学生~高校生(親子参加も可)

※成人のみでのお申込はご遠慮下さい

●参加費：食材費800円程度

●その他：希望により幼児保育あり

●協力：かながわこどもひろば他

●問合せ・申込先：地球市民学習課(月曜休み)

TEL:045-896-2899 FAX:045-896-2945

E-mail:kakeshin@k-i-a.or.jp

## 神奈川県国際研修センター センター・デーのお知らせ

海外からの研修生・留学生の宿泊研修施設で行われる、年に1度のお祭です。研修生・留学生との交流の1日をどうぞ。

### ■研修生・留学生による料理教室

(10:00~12:30)

a. 皮からつくる、中国のぎょうざ

b. タイ料理&ブータン料理

(事前申込制、材料費700円、定員各15名定員になり次第締切)

### ■ミニ・バザー (12:00~)

※販売する品物のご寄付を募っています。

### ■音楽と踊りのパフォーマンス (13:00~)

カンボジアの太鼓と踊り「チャイム」、中国の二胡とキーボード演奏、タイの踊り。

### ■留学生との語らいの場 (14:30~)

■その他：東南アジア寺院建築やモンゴル

の文化についてのミニ・レクチャー、民族衣装の試着、交流のコーナーなど。インドネシアの焼き鳥、韓国のチヂミなどのミニ屋台も出ます!

●日時:2003年11月16日(日)

開場12:00(料理教室のみ10:00) 閉場17:00

●場所:神奈川県国際研修センター

●入場料:無料(料理教室のみ材料費)

●問合せ・料理教室申込み・バザー用品送付先:神奈川県国際研修センター

〒241-0815 横浜市旭区中尾2-6-1

TEL:045-366-0157 FAX:045-366-0164

E-mail:kpitc@k-i-a.or.jp

※プログラムは一部変更の可能性あり。特に参加をご希望のプログラムは事前確認をお願いします。

※神奈川県国際研修センターは、神奈川県からの委託を受け、当協会が運営しています。

●神奈川県国際交流協会(KIA)は—地球のすべての人が、国境や人種、文化の違いを越えて、人間らしく暮らせる社会の実現のため、人と人とのつながりを大切に「国際交流」「国際協力」を推進するさまざまな事業を展開しています。

### ●あなたも会員になりませんか?

#### ★学生会員制度もスタート!

協会の活動を支える会員を募集しています。会員になると

- ①協会が主催する各種催しや国際交流団体、NGOの催し情報、ボランティア情報を掲載した「HelloFriends」「サラダポウル」をお送りします。
- ②当協会の出版物の割引サービスが受けられます。
- ③会員の方を対象にした催しへご招待します。
- ④『エスニック・レストラン・マップ』をお送りします。
- ⑤会員証の提示で、提携エスニック・レストランの優待サービスが受けられます。
- ⑥「あーだ 355」のレストラン「メルヘン」でお食事の場合、会員証の提示で、コーヒー、紅茶、グラスワイン、ソフトドリンクの一品サービスが受けられます。
- ⑦「あーだ 355」ショップ「ベルダ」で2,000円以上(税別)購入の場合、会員証の提示で10%割引が受けられます。

年会費：一般	3,000円から
学生	1,500円から
団体	10,000円から

\*会員登録をご希望の方は、協会までお問い合わせください。振込用紙など関係資料をお送りします。

★当協会は、2003年4月より、「あーだ 355」の施設運営を含めた全事業を神奈川県から受託しました。



このほか、神奈川県国際研修センターと神奈川県国際学生会館を運営しています。

## 国際理解・国際協力のためのポスターコンテスト・中学生作文コンテスト審査会結果

9月12日の審査会で、次の作品が選ばれ、全国大会に出品しました。

●ポスター優秀賞受賞者：<小学生>水越健太、松岡里紗、小笠原早紀、堀米咲帆、野呂竜太、堀内南、<中学生>中村葵、川橋望美、山本陽、羽田桜

●作文優秀賞受賞者：須藤愛子(中3)、酒本

雄一(中3)

この他、優秀作品8点、佳作10点、努力11点が入賞しました。

今回入賞したポスター作品は、12月6日から12月14日まで、「あーだ 355」3階企画展示室で展示。入場無料です。(敬称略)

## かながわ民際協力基金2つのプロジェクトへの助成を決定

NGOの国際協力活動の支援を目的とした「かながわ民際協力基金」前期の助成対象事業が決定しました。

【①プロジェクト名②団体名③助成額④助成枠⑤事業概要】

I①IAPE青少年プロジェクト 南米の若者が調べる・伝える「ニッポンの仕事・学校・社会

②IAPE(外国人児童生徒保護者交流会)

③120万円 ④国内協力 ⑤南米出身の若

者が将来の進路について具体的なイメージ

や希望を持つことができるよう、日本社会で

活躍している南米出身者を若者自身が訪ね

てインタビューし、取材内容を翻訳、冊子に編集する。また、地域で報告会を開く。

II①「アガペ交換研修プログラム」25周年記念プロジェクト：実績の調査分析と将来の方向性研究 ②(社福)日本キリスト教奉仕団

③50万円 ④団体活動充実 ⑤アジアから

の研修員を招へいするプログラムが25周年

を迎えるにあたり、過去の研修員にアンケート

およびインタビューを行い、事業の分析、評価

を行う。同時にアジアの障害者福祉の情報

収集を行い、障害者自立援助に向けた国際

協力のあり方を検討する。

Hello friends 2003年11月1日発行 第235号

発行/財団法人 神奈川県国際交流協会  
〒247-0007  
横浜市栄区小菅ヶ谷一丁目2番1号  
神奈川県立地球市民かながわプラザ1階  
☎045-896-2626 FAX.045-896-2945  
URL:http://www.k-i-a.or.jp  
E-mail:kikaku@k-i-a.or.jp

印刷/吾妻印刷株式会社

■最近、「アフリカ」関連の行事が続いている。9月には東京「ICAD」第3回アフリカ開発会議が開催され、Eイスをテーマとしたアフリカドキュメンタリー映画祭も開かれた。そして私事だが、10月は当協会開催の「アフリカ料理講座」を担当した。どれも、多様なアフリカの現実、社会、文化の一部にすぎないし、一言でくくれる程単純ではないアフリカだが、この単語を見るたびに体が反応してしまう。

■「アフリカ料理講座」に向けて、この北アフリカの国についての本を読み、材料を揃え、レシピを読み込んだ。しかし実際の料理を口にするまで、どんな料理なのか具体的なイメージはわかかなかった。「トマトとパセリ、オリブオイルをたっぷり使った料理」とどんなに文字で説明しようとしても、なかなか伝えられないこの「香り・味」。

■料理にしても、旅にしても、やはり実際に自分で体験しなければ、わからないことだらけだ。でも、幸いに私たちは、望めば様々な国・地域の味を楽しむことができる。そして、旅するということも、味わうことができる。

■今回の紙面で紹介したように、協会では中央アフリカのルワンダへのツアーを企画している。参加者の方々と共に、新たな発見があるような旅を作りたいと思う。真美さんのインタビューにもあるように、ルワンダの人々、空気、味に会う旅に参加しませんか。お申し込みお待ちしております。

(国際協力課 富本潤子)

キャラバン・サライ

※キャラバン・サライとは、かつてシルクロードにあった隊商宿。文化・情報の中継点となっていました。協会職員からのメッセージ発信の場となるよう名付けました。